十字架を誇りとして

「ガラテヤ人への手紙」6 章 11～18 節までを朗読。

14 節「**しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇りとするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである**」。

パウロが伝道し、イエス・キリストの福音が伝えられ、多くの人が集まり、ガラテヤの教会が出来ました。集まった人は、おもにはユダヤ教からの改宗者ですが、長年ユダヤ教の伝統の中に生きていた人々です。ユダヤ教は私たちにとってはあまり馴染みがありませんが、旧約聖書のモーセの五書と言われる、創、出、レビ、民、申命記という 5 つの書を中心に語られている神の律法を守る。これが神様の前に罪を赦され、神の民となる唯一の道と信じてきました。

神様はイスラエルという一つの民族を選んで、ご自分の力と愛と恵みを証しする器としたのは事実です。父祖アブラハムという一人の信仰者を選んで、その末裔と言いますか、そこから続くイスラエル民族を神様の恵みの民、愛の民として下さいました。彼らが神と共に生きる道、神様の前に正しく歩む道筋を定めたのが、律法でありました。モーセの十戒に代表されるように、人の前、神の前、人と人との交わり、神様に仕える道を細かく定めたわけです。

その中でも最も大切なものとして、割礼を求めました。それは男子の身体に傷をつけることによって、神様に自分をささげきってしまう行為であります。そのことを行わなければ、イスラエルの民、神の選びの民になることができない。言うならば、神に義とされることがない。これがイスラエルの人々、ユダヤ教を信じる人々の、長年守り伝えてきた一つの習慣であります。その他にもいくつも細かな規則があります。安息日を守るべきであるとか、あるいは偶像を拝んではならないとか、細かく規定されています。

毎日の生活の隅から隅まで、律法に縛られた生活を強いられてきたのが、ユダヤ教の長い伝統でありました。そのことを通して、神様が求めているものが何であるかを表した具体的な行動規範でもあったのですが、人がそれらを守り行うことは到底できないことです。私たちでも自分が決めた規則を守り通すことはなかなか出来ません。自分で決めていながら、三日坊主ということがよくあります。まして神様が定められた一つ一つの約束事を、きちんと落ち度なく守ることはなかなか困難です。しかしそれをしないことには、神様に義とされない、いわゆる永遠の命、天国に入れて頂くことが出来ないわけですから、これはまことに重大なことです。この世の事だけでなく、死んでから先の事まで、律法を守る事にかかっている。これは大変な事であったと思

います。彼らはそれを忠実に守っていました。それは、律法によって神の道を達成する、義なる者となるのが、いかに不可能に近いかを悟らせ、人の罪が何であるかを実践的に教育するものです。

やってみると、出来ない。ある程度は出来るかもしれません。しかし、「安息日を聖くせよ」と言われ、労働してはいけない、働いてはいけないとなる。それを細かく言い始めると、働くとは何か、朝、食事の準備をしたらいかんのか。一日食べる物はどうする。何か緊急事態が起こり、急いで行かなければならない時はどうする。安息日の場合は、自分の家から100メートル、150メートル以上歩いてはいけないと決められている。煮炊きするために薪を拾いに行く。その日が安息日であれば、薪を拾いに行くのはご法度。そういう細かい規則が作られていました。

旧約聖書に語られていますが、それを土台にして、タルムードと言われるユダヤ教の経典が出来てきます。むしろ、聖書よりそちらの方が重視される。神様がそのことを求められたのは、人が自分の力で、努力で、神様の前に義とされる道がないことを徹底して悟らせることが、一つの目的でありました。もちろん他にも律法の果たす役割はありましたが、何よりも大切なのはそのことだったのです。

では、人は救われないのか、義とされる道はないのか。そのことについて出された神様の答えがひとり子イエス・キリストをこの世に遣わして下さるということであります。すべての者は、神によって造られ、神様のかたちに尊いものとして造られたのですが、造り主である神様を忘れて、身勝手な、自分本位の生き方、自分たちの力によって、思いを遂げようとするようになった。神様はそれが罪であること、神を神としない、造り主でいらっしゃる神を忘れてしまうということが、それが人の罪であると、神様は語っている。それが律法を通して語られたことです。人の力や努力によって、自分を義とすることができない。誰だって自分の思いをきよめ、立派な人間、品行方正、どこにも悪いところがない、非難されることのない人間になろうと努めても、自分では出来ません。誰も神様の前に義とされる者はいないのかというと、まさにその通り、誰もいません。そのことが「ローマ人への手紙」に記されています。一つ読んでおきましょう。

「ローマ人への手紙」3章9～18節を朗読。

10節に、「**義人はいない、ひとりもいない**」とあります。義なる人、神様の前に罪なきと言える人は、誰一人いない。確かに、自分を振り返って考えてみると、自分ほど立派な人はいないと、自信をもって言える人はいない。まあ、あの人よりは少しマシ。しかしあの人よりは、と比較して、相対的に自分の良さを認めて、まあ、俺もまんざらではないなと思っているかもしれませんが、神様の目から見たら、すべてアウトです。滅ぼされて当然であります。10節に「**義人はいない、**

ひとりもいない」と言われるように、神様に義とされる人、神様の前に罪なきとされる人は誰もいないのです。悟りのある人、神を求める人はいない。ここに神を求める人がいない。なぜならば、すべての人の罪の根源は、造り主なる神様を離れて、己を神とすることです。自分が正しく、自分が義なるものであって、自分が考えること、思うこと、願うこと、これが一番正しくて、また自分が幸せになる道だと多くの人は思う。また私たちもかつてはそう思っていました。「俺が、俺が」、「私が、私が」「私がこうしたい、私がこうなりたい」、「私が嫌だから、好きだから、嫌いだからなんとか」と、常に自己中心ですね。自我性、己というものがそこにあります。

その“己”は必ず神様に対抗していきます。自分よりも力あるものを認めることが出来ない。私がこう思う、私がこう考えるということに固着する。これが私たちの罪の姿です。いや、そんなこと言われたら、どうすればいいのかとなりますが、罪にまみれた不義なるものとなった私たち、造られながら神を忘れて、神のかたちであるきよいもの、尊いものを失ってしまった私たちを、もう一度、新しく造り変える。新創造するために神様はご自分のひとり子を遣わして下さった。12 節以下にも、人がいかに罪なる者であるかが記されています。「**すべての人は迷い出て、ことごとく無益なものになっている。善を行う者はいない、ひとりもいない**」と。真に善を行う者はいない。しかも「**彼らののどは、開いた墓**」、そこから出て来るものは欺きであり、まむしの毒である。15 節に「**彼らの足は、地を流すのに速く、彼らの道には、破壊と悲惨とがある**」と。今、この世のニュースを見ますと、まさにこの通りです。次から次へと悲惨な事態や事柄が頻発していきます。人の世の様々な欲得、利害がぶつかって、その結果、次々と悲惨な状況の中に置かれている。一番の問題は何か。18 節の最後に言われているように、「**神に対する恐れがない**」ことです。どうしてこうなった。なんでこうなったのだ。いつも不平不満、つぶやく思い、いらだち、そういうものを心に抱えている。ですから「エペソ人への手紙」には、罪ととがとに死んだものと言われています。まさに喜びなく、望みなく、感謝なく、また主を求める、神様を大切に思う、尊び、敬う心がない状態。そして自己中心、わがままで、自分だけの思いを押し通す。自分の考えを徹底して貫こうとする。そのために人とぶつかり、いろんな事態や周囲の事柄に巻き込まれて、不平、不満、いらだち、つぶやき、怒り、憤り、劣等感やあるいは優越感に振り回されているのが、私たちの姿であります。

そういう到底救いがたい、神様の前に滅ぶべきはずの私たちを、神様はあわれんで下さった。これが神様のご愛です。神様は私たちの滅ぶべき姿を見て、あわれみ、何とかしてその中から、救いを成し遂げようとして下さった。キリスト教の救いとはここです。世の中のいろいろな宗教は救いを言いますが、家内安全、無事息災、交通安全、商売繁盛など、い

ろいろなご利益を言いますが、それが救いではありません。

聖書を通して神様が私たちに与えて下さる救いとは何か。滅びと罪からの救いです。滅ぶべき者が救われるためにどうするか。努力して、自分の生き方、歩みを、品行方正、誰一人咎められるところのない、後ろ指されることのない生き方が出来るかというと、出来ません。神様はそのことをご存じです。かつてイスラエルの民がその失敗を体験しています。だからこそ、神様に頼る他ない。神様によって救われる以外ないのです。その救いの道を開いたのが、ひとり子イエス・キリストです。なぜそんなにまで私たち滅ぶべき者を、なお神様は惜しんで下さったのか。それはただ一つです。神様が私たちを愛して下さるから。私たちを愛するに何の理由もありません。私たちに取り柄があるから、見栄えがいいから、何か役に立つから愛すると言うのではない。強いて言うならば、神様がご自分のかたちにかたどったものとして、尊いものとして私たちを造った、そのことのゆえに、それを惜しんで下さり、ねたむほどに愛してと、「ヘブル人への手紙」にあります。神様は私たちを神のかたちに、尊いものとして造って下さった。他のすべての被造物とは全く違うのです。神様に最も近いものとして、もちろん神ではありません、またあくまでも被造物でありますが、神に近いものとして造られた私たちを、失うことを惜しんで下さった。これが神様の愛であります。

そして私たちの罪を贖うため、きよめるために、何が必要か。償わなければならない。神様に造られていながら、神様を離れて、神を恐れる思いを捨て、そして自己中心、わがままな、自我性に支配され、罪に囚われて、身勝手な生き方をしてきた。その私たちの歩みをリセットする。全部取り壊して、新しく造り直す。では、私たちが死んでお詫びをすればよいか。しばしば申し上げるように、こんな腐ったようなものをいくらささげても、何の値打ちも価値もありません。役に立ちません。私たちの罪を贖うためには、罪なき全き方が、あえて私たちの罪を負うて下さること、これがなければ救われません。神様のなさるわざは、あまりにも不思議です。人を救うのにどういう手を用いるか。神様だから、一言をもって、「もうチャラにした、もうそんなものはなかったことにしてやる」と言ってくれれば、それでおしまい。でも、もしそれをしてしまえば、神様としての権威、力、正義は失われます。神様は適当にやられるんだ。正義とか正しさ、義が失われてしまいます。義を貫くためには、どうしても罪なるものを赦すわけにはいかない。毛筋一本、どんな罪であろうと、それは完全にアウトです。だから私たちに救われる道はないのです。神様から問われたなら、義を追求されたら、私たちは滅びる他ありません。

それに対して、神様は、あえてこの世に、神の御子でいらっしゃるひとり子をこの世に遣わされた。神なるお方が人となって、この世に降り、私たちと同じ肉

の身体をもって、一人の人となって下さった。そして私たちと同じ肉体をとって、この世に生きて下さった方が、私たちすべての罪人の右代表、身代わりとなって、十字架に命を絶たれて下さった。罪なきイエス様が十字架に死んで下さる。これがなければ、私たちは到底神様の前に義とされることがない。私たちにとって、キリストの十字架こそが、新しい始まりであり、また古いものの終わりでもある。これによって、神様はご自分の愛を貫くことが出来、私たちの罪が赦されると同時に、神様の正義、その力も全うされる。神の義とまた神の愛がイエス様の十字架によってはじめて完成したのです。

私たちはこのイエス様の福音に触れて、十字架の恵みにあずかりました。その恵みとは何であったか。それまで神なき者であった私たち、罪と咎とに死んでおった者、到底許されるはずのなかった私たちの罪を、主イエス・キリストが、私の身代わりとなって、十字架に命を絶たれて下さった。そのことを知って、私もキリストと共に十字架に死んだ者ですと告白したのではないでしょうか。私はよく申し上げますように、若い頃、自分の罪に苦しみました。何が罪か。自分が正しいという、義人であるという思いが強かったのです。自分は品行方正、誰からも立派な人間と言われてきた、と思っていました。そういう人は非常に扱いにくい。誰を見ても、必ず欠点が見える。「あそこが出来ていない、ここが出来ていない」、そういう人をさばく思い、批判する思い、これが常に心にあるのです。それに引き換え、自分はこんな良い所がある、自分はこんなにしている、自分はこういう事をしている、何がいけないことがあろうか。しかも生まれながらに牧師の家庭に生れましたから、物心ついた時から神様のことを聞いていますので、自分が正しいことの裏付けとして、神様を担ぎ出します。これほど厄介なことはない。だから世の中に宗教戦争というのがありますが、これは一番過酷な戦争です。しかも妥協できない戦争です。なぜなら、己を正義とし、その裏付けとして神様を持ち出すのですから、これは厄介です。私もそうでした。自分は神様を畏れ敬って、私は正しい、神様に喜ばれる道を歩んできたという自負がありますから。だからそれをもって、見る人、聞くもの、何もかも切っていきますから、毎日が針ねずみのようです。

そういう生活は、決してうれしくない、楽しくない。逆に人を批判しますから、さばきますから、自分がさばかれているのではないかと、恐れがあります。常に守りの姿勢があります。人から何か言われまいとする。私たちが、自分のしていることを他人から批判されるのを嫌がるのは、自分を義としている時です。自分が正しいと思っているから、人から何か言われると、腹が立つ。「あの人、私に理不尽な事を言う、難癖をつけて」と思っているのは、自分が神様を押しのけて、俺が神だと主張している時です。そういう私でした。ところが、それは大変疲れます。人前に出ると、常に格好つけて、人から何か指摘されないだろうか、何か

言われないだろうかと、常に気にします。そして「言われる前に人に言ってやれ」と、本当に苦しかったですね。そういう時に、聖書の言葉を通してはじめて、イエス・キリストの十字架が誰のためであったかを知りました。

「ルカによる福音書」の「**父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているか、わからずにいるのです**」(23:34)との言葉に出会いました。イエス様は誰を赦せと仰っておられるのか。その時、自分は赦されていると思っていました。その御言を知らないわけではない。「父よ、彼らをおゆるしください」、「そうそう、わたしもそうだ。赦さないといけない。あんな悪辣な連中、あんな出来損ない、あんな死んで当然の者、虫けらみたいな連中、腹が立つけど、赦さないといけない」と思っていました。なんだか自分がキリストになり代わった位に思っている。だから、かえって始末に悪い。そういう時に初めてイエス様は誰のために「父よ、彼らをおゆるしください」と言っているのか。とりもなおさず自分ではないか。赦されなければならないのは自分なのだと、初めてその時に気がついた。

それと同時に、それまで鎧かぶとで身を固めていた、誰からも非難されまいと思っていた、その肩の荷がガラッと崩れる。心が空っぽになりました。それまでそういう活動の中におりましたが、そこから一切手を引きました。そしてただ、神様に赦され、生かされている自分。思いがそこから変わっていく。それ以前、どうだったのか。洗礼はとっくの昔に受けている。数年前に受けていた。洗礼を受ける時、イエス様を救い主と信じたのは確かですが、どうも信じ方を間違えていた。初めてです、自分の罪というものが何であるかを徹底して悟らされた。それと同時に、イエス様の十字架、この十字架につけられて、主が死んで下さった、それはわたしの死であること、そして今、生きているのは、主によって生かされている、赦されるわたし。完全に 180 度、方向が変わったのです。そのことが「ローマ人への手紙」に記されています。

「ローマ人へ手紙」6 章 6 節から 8 節を朗読。

6 節に「**わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた**」とあります。まさにその通りで、わたし自身の古き人、己を神とし、自分を正しいとし、それが唯一絶対のものとして、主張していたわたし、口では神様と言いつつ、心では神様に何一つ、思いを向け、委ねよう、従おう、尊び敬うという思いが無かった自分。まさにその古き人はキリストと共に滅び、十字架につけられた。そしてわたしが死ぬべきところを、イエス様があのむごたらしい十字架に釘づけられ、槍で胸を刺され、血を流し、わたしの罪の贖いとなって下さった。身代わりとなって下さった。わたしもキリストと共に死んだ。そこに立った時、初めて肩の荷が軽くなったと言いますか、何があっても主が善しとして下さる。神様が味方となって下さる。これは大きな力です。十

字架が古き自分の終わりです。それと同時に今度は、新しい生き方、それは神に仕える者としての生き方。かつてはそうでなかった。完全に十字架の前と後、これは全く違ったものになっていきます。かつて、皆さんも同じ中を通ってこられたはずです。キリストと共に十字架に死んだのです。そして今生きるのは、「**キリストがわたしのうちに生きておられるのである**」（ガラテヤ 2:20）とあるように、よみがえって下さった主の命によって生きるものとされている。6 節に「**わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた。それは、この罪のからだが滅び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである**」と言われています。もう二度と、罪の奴隷となることがないためである。じゃあ、イエス様の救いにあずかって、十字架の贖いによってきよめられた者となって、それ以降、わたしは品行方正、聖人の道を歩んだかというと、到底そうではありません。失敗すること、つまずくこと、何度となく、転ぶこともありました。しかしその度に、十字架に立ち返る、これが恵みです。

イエス様は「事畢（をは）りぬ」（ヨハネ 19:30 文語訳）と宣言され、徹底した贖い、救いを完成して下さった。もう二度と、私たちを罪に定めることはしないと、「ローマ人への手紙」にあります。「**だれが、神の選ばれたものを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである**」（8:33）。神様は「**我に就（きた）る者は我かならず之を棄（すて）ず**」（ヨハネ 6:37、元訳）とおっしゃる。十字架によって贖いを成し遂げて下さった神様は、私たちがどんな失敗をしようと、決して捨てない。だから常に主に立ち返るのです。これが限りない愛です。ひとり子を賜うほどの限りなき愛をもって私たちを愛して下さった神様の愛は、常に私たちを義として下さる、ここにあるのです。私たちの救いの原点、常に立つべきところがどこにあるかを確かにしておきたい。その後 7 節以下に、「**それは、すでに死んだ者は、罪から解放されているからである。8 もしわたしたちが、キリストと共に死んだなら、また彼と共に生きることを信じる**」と。今私たちはキリストと共に生きているのです。十字架を通して、イエス様は私たちの内に宿って下さった。

ですからまた初めに戻りますが、「ガラテヤ人への手紙」6 章に「**しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇りとするものは、断じてあってはならない**」。本当にその通りです。断じてあってはならない、大変厳しい言葉です。ともすると、わたしたちは十字架以外にも、何かが役に立つだろうかと思うかもしれません。しかし絶えず見ておくべきものは十字架です。その十字架なくしては、私たちは滅びです。その十字架によって罪を赦され、古きものはそこに死んで、十字架によってよみがえった主が私の内に宿って下さる。ですから、教会に来ると、十字架のかたちのマークがあります。これは教会の家紋ではありません。まさにこの十字架は誰のものか。他ではない、私のもの。

日本の教会の十字架は形だけの十字架ですが、ヨーロッパの教会を見ますと、必ずそこに生々しいキリストの像が、しかも丁寧に血を赤く染め、見るとむごたらしい印象です。日本の教会ではそれほど仰々しくしませんが、私はそれを見る度に、まさにこのむごたらしさこそ、自分の罪なのだと気づきます。ある意味でこの姿を見ることは、大きな意味があると思います。私たちはどんな大きい犠牲を払われた者であるか、命をもって贖われた者であるか、その背後に主のどんな苦しみがあったのか、この事を片時も忘れてはならない。それが14節の言葉です。「**わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇りとするものは、断じてあってはならない**」。私たちはこの世のものとしてではなくて、キリストのもの、神のものとされた、贖われた民、そしてこの世は私に対して死んだのである。私もこの世に対して死んでしまったのである。私たちは今なお、この世に生きてはいますが、もはやこの世のものとして生きているのではなく、キリストのものとなって、この世にあって同じ事をしているようですが、その一つ一つのわざがキリストのものとして、させて頂いている。かつては自分の誇りであり、自分の力であり、自分のわざであったものが、今はそうではありません。キリストのもの、主のわざ、主の力、主の知恵によって、今日こうして生かされているわけです。十字架を常に私たちの心の中心に据え、パウロが言うように、常にキリストと共に死んでいる。主の十字架と共に私も死んだ者、そして今日も主の命によって生かされている自分であることを絶えず覚えておきたい。またそれが私たちの誇りです。この十字架以外に誇りとするものは、断じてあってはならない。

私たちの大いに感謝し、誇るべきは、罪人である者が、罪人のかしらたる者が、今、この十字架によって、キリストと共に死んだ者です。どうぞ、新しい命、キリストの命に生かされ、輝き、喜びと望みと命をもって生きる者となりたいと思います。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。